

「マホメツト喚山」説話の東西伝播

一、漱石とフランシス・ベイコン

夏目漱石（一八六七—一九一六年）の小説『行人』⁽¹⁾の「塵勞」第三十九—四十節には、「私」がモハメツド、すなわち預言者ムハammad Muhammad（五七〇年頃—六三三年）に関する次のような逸話を語る箇所がある。

私がまだ學校に居た時分、モハメツドに就いて傳へられた下のやうな物語を、何かの書物で讀んだ事があります。モハメツドは向ふに見える大きな山を、自分の足元へ呼び寄せて見せるといふのださうです。それを見たいものは何月何日を期して何處へ集れといふのださうです。

期日になつて幾多の群衆が彼の周圍を取卷いた時、モハメツドは約束通り大きな聲を出して、向ふの山に此方へ來いと命令しました。所が山は少しも動き出しません。モハメツドは澄ましたもので、又同じ號令を掛けました。それでも山は

杉田英明

依然として凝としてゐました。モハメツドはとうとう三度號令を繰返さなければならなくなりました。然し三度云つても、動く氣色の見えない山を眺めた時、彼は群衆に向つて云ひました。「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では來たくないやうである。山が來て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」。彼はさう云つて、すた／＼山の方へ歩いて行つたさうです。

周知のように、大学で教鞭を執る『行人』の主人公・長野一郎は、「詩人らしい純粹な氣質」のため、愛や眞実の本体を極限まで追求して「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」ところまで到達するが、「然し宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ留められさうだ。なればまあ氣違だな」と言つて、そのいづれをも選ぶことができない。これに対し、弟の二郎の依頼で二郎と一緒に旅をすることになったH——その旅の報告書である二

郎宛ての手紙のなかでは一人称の「私」——は、右の逸話が「宗教の本義」を表わしていると考え、「何故山の方へ歩いて行かない」と一郎に迫る。

漱石はこの逸話をその十数年前の一八九八(明治三十二年)、『ほととぎす』に寄稿した「不言之言」のなかでも取り上げていた。東西で類似するさまざまな故事や格言の例を紹介したこのエッセイでは、「一休飲魚」と「マホメット」喚山」とが対比され、「マホメット」の談は「ベーコン」の論文中にありしを記憶す⁽⁶⁾。両者とも眞偽の程覺束なし」と締め括られる。この「ベーコン」の論文」とは、ベイコン Francis Bacon (一五六一—一六二六年)の『随想集』*The Essays or Counsels, Civil and Morall* 第三版(一六二五年)の第十二章「大胆について」Of Boldnesse である。その一節に曰く、

諸君は大胆な手合いがマホメットの奇跡を何度も行なうのを見るであろう。マホメットは丘を自分のほうに呼び寄せ、その頂上から自分の授けた捷を守る人々のために祈りを捧げると、ということを民衆に信じさせた。民衆は集まった。マホメットは丘に自分のほうにくるよう何度も呼びかけた。丘がじつとしたままであった時、彼は少しも悪びれずに、「丘がマホメットのほうにこようとしないうなら、マホメットが丘のほうへ行く」If the Hill will not come to Mahomet, Mahomet will go to the hill. と言った。このように、こようした手合いは、どえらいことを約束し、失敗して面目が丸つぶれになっても、

(彼らが申し分なく大胆であるならば)それを鼻であしらい、やりすごし、騒ぎをおさめてしまふ⁽⁷⁾。

このように、ベイコンの原文では、マホメットの反奇蹟譚——奇蹟を起こそうとして失敗するという話型を便宜的にこよう呼んでおこう——は彼の大胆さの一例として挙げられているので、漱石は同じ逸話をまったく別の文脈に置き換えて利用したことになる。

二、ヨーロッパ文学における用例

ベイコンの引く反奇蹟譚について、『英文学のなかのイスラム』*Islam in English Literature* (一九三九年初刊)の著者スミス Byron Porter Smith (一八八九—一九五五年)は、「他の作家による明確な言及もないし、その起源も知られていない」と記している⁽⁸⁾。しかし実際にはベイコン以降、これはヨーロッパ文学においてさまざまな作家が引用する、比較的よく知られた逸話ないしは格言となつていったようである。現在では、「山がマホメットの方へ来ないのなら、マホメットが山へ行かねばならない」といった形で、引用句辞典や諺辞典の類にも登録されている⁽⁹⁾。

例えば、十九世紀英文学の領域では、ブロンテ Charlotte Brontë (一八一六—一八五五年)の『ジェイン・エア』*Jane Eyre* (一八四七年)の一節が挙げられる。主人公のジェインは、家庭教師として住み込むソーニールド荘の主人ロチェスター氏に、それと知

らず初めて道で出会う。そのときロチェスター氏は土手道で滑って落馬し、怪我をするので、ジェインが手を貸そうとする。ロチェスター氏は「馬の手綱を取って、わたしの方まで連れてきて下さい」と頼むが、ジェインが試みても馬は言うことをきかない。ロチェスター氏は笑い出して、

「なるほど。山は決してマホメットの方へは動かん。だから、あなたが精々やれることは、マホメットを山へ近づける手伝をすることだな。ここへ来てもらわなければ」

“I see,” he said, “the mountain will never be brought to Mahomet, so all you can do is to aid Mahomet to go to the mountain; I must beg of you to come here.”⁽⁹⁾

と言い、ジェインの手助けで跛を引きながら馬のところへ辿りつく。この文脈では、「我々は望み通りの事柄をなすことはできないので、できる事柄をしなければならぬ」といった意味での格言風の引用になっている。

また、フランス文学では、バルザック Honoré de Balzac（一七九九—一八五〇年）が短編「二人の若妻の手記」*Mémoires de deux jeunes mariées*（一八四二年）で同様の格言を利用している。ルネへ宛てた手記のなかで、ルイズは恋人のフェリーペについて、自分は「命令する恋と服従する恋」のうち前者を選ぶという意思を表わすために、

ルネさん、ごらんのとおり、恋はひとりであたしのところへ来たものではありません。あたしはマホメットが山にたいしてしたようにふるまったのです。

Tu le vois, ma chère, l'amour ne venait pas à moi, j'ai agi comme Mahomet avec sa montagne.⁽¹⁰⁾

という言葉を使っている。恋人に対して受け身になるのではなく、自らが主体的に働きかけることを、「マホメットが山にたいしてしたように」振舞うと表現したことになる。

さらに、バーゼル出身のドイツの教育者・聖職者として知られるヘーベル Johann Peter Hebel（一七六〇—一八二六年）の暦物語『フインの家の友の宝函』*Schatzkästlein des Rheinischen Hausfreundes*（一八一一年）に収められた「マホメット」Mahomedも同じ主題を扱っている。奇蹟を求める信徒たちに向かって、マホメットは「奇蹟を起こすだけでは預言者として一人前とは言えないが、そなたたちが望むのであれば、向こうの山と私とをすぐさま近づけてみせよう」と言って、山に移動を命ずる。しかし山は動かず、返事もしなかったので、「マホメットは物静かな様子で杖を取り、山へ歩いていった」——ここから著者は、マホメットが示す教訓を次のように語る。

つまり人は、自分自身でできる事柄を、超自然的な宿命、時と運、あるいは他の人間に求めてはならぬのだ。例えばあなたが必要不可欠な重要事について誰かと話し合わね

ばならないのであれば、相手が自分のところへ来るのを待つていてはいけない。あなたが相手方へ赴く方がずっと早くて賢い。庭に小さな桜の樹が一本あったら素晴らしいだろう。その場所はまさにうってつけなのに。(そう思ったら)桜樹が自生するのを待つのではなく、一本植えなさい。さらには排水溝や村を貫くしっかりとした道路、少なくとも乾いた歩道、子供が落ちないように水辺や狭い小橋につける手すりなどは、人がそれを作る方が作らないよりずっと早く実現する。そのような事柄を、アラビアの預言者ないしは暦物語の作者がまず理解させてやらねばならない人々が存在する、などと考えるべきではない。⁽¹²⁾

ここでも、ブロンテの小説の場合と同様、「各人は自分のできることをなすべきである」、さらには「自分にできる身近な事柄を率先して始めよ」という教訓がマホメットの逸話から引き出され、その倫理的な行動規範が、読者に身近な日々の生活の具体例に即して語られる。聖職者が教会で民衆に語りかける説教といった趣きは、ヘーベルの暦物語全体を貫く特徴でもあった。

他方、同じ格言が人間関係に適用された場合には、「動ける者が動けない者を訪問すべし」といった意味でも用いられたらしい。イギリスの作家ゴールドスミス Oliver Goldsmith (一七二八―一七四年) が一七五七年十二月、アイルランドにいる義兄のホドソン Daniel Hodson に宛てた手紙のなかで、

山がマホメットの方へやってこないのなら、そのときはマホメットが山の方へ行くべきでしょう。つまり簡単な英語で言えば、あなた方に私を訪れる便宜がないというのでしたら、次の夏に六週間ほどロンドンを離れることができた場合、私の方がそのうちの三週間はアイルランドの友人の許で過ごしましよう。

[T]herefore as the Mountain will not come to Mahomet, why Mahomet shall go to the Mountain, or to speak plain english as you can not conveniently pay me a visit, if next Summer I can contrive to be absent six weeks from London I shall spend three of them among my friends in Ireland.⁽¹³⁾

と記しているのはその一例である。⁽¹⁴⁾

三、中東世界での展開

(一) 起源としての奇蹟譚

ヨーロッパ世界で流布したこの種の格言ないし説話の起源は、預言者の時代のアラブの逸話にまで溯るように思われる。イブン・イスハーク Muhammad 'ibn 'Ishāq (七六七年歿) が著わし、イブン・ヒシャーム 'Abd al-Malik 'ibn Hishām (八三三年歿) が編纂した『預言者伝』*al-Sira al-Nabawiya* の第一巻第七章には、イブン・イスハークの父親からの伝承として、預言者がクライシュ

族のルカーナ Rukāna 'ibn 'Abd Yazīd 'ibn Hashim 'ibn al-Mufāliḥ (六六一年頃歿) に対して示した奇蹟譚が二つ語られている。部族中で最強の男と言われたルカーナに預言者が改宗を促し、彼を二度に亘り組み打ちでねじ伏せたという第一の逸話に対して、第二の逸話は次のように続く。

神の使徒(ムハンマド)が、「もしお望みなら、これよりもっと驚くべき事柄をお見せしよう。お前が神を畏れ、私の(改宗への)命令に従うならばの話だが」と言うと、ルカーナは「それは何だ」と答えた。「お前のためにあそこに見える樹を呼んで、私の許に来させよう」という使徒の言葉に、ルカーナは「呼んでみる」と答える。そこで神の使徒が樹を呼ぶと、樹は近づいてきて彼の面前で止まった。それから「元の場所へ戻れ」と言うと、樹は元の場所へ戻った。ルカーナは一族の許へ行き、「アブド・マナーフ家の面々よ、お前たちの仲間(預言者)の力により、世界の人々を魔法で打ち負かすがいい。神かけて言うが、奴のように魔法に秀でた男はこれまで見たことがない」と言った。そして彼らに、自分が目にし、使徒が行なった事柄を語った。¹⁵⁾

アブド・マナーフ 'Abd Manāf は、ムハンマドが属するメッカのクライシュ族のうち、彼の曾祖父であるハシム Hashim の父親の名前、ルカーナは同じクライシュ族のなかでも、ハシムの兄弟ムッターリブ al-Muṭṭarīb の曾孫に当たると注意すべきは、

逸話の元の形が預言者の反奇蹟譚ではなく奇蹟譚であり、奇蹟を起こす対象は山ではなく樹木だという点である。ドイツの東洋学者ホロヴィッツ Josef Horowitz (一八七四—一九三二年) が指摘するように、『預言者伝』以降、この奇蹟譚は少しずつ変容を蒙りながら、さまざまな文献に取り上げられてゆく。そのなかで、ルカーナと預言者とのあいだの逸話という形を保持しているのは、歴史家イブン・アル・アスィール 'Ibn al-'Aṣṣīr, 'Izz al-Dīn (一一六〇—一二三三年) の教友伝『茂みの獅子』 'Uṣḍ al-Ghāba wa 'As-Sayyid al-'Alī al-Kamil fī al-'Aṣṣīr であろう。前者のルカーナの条によると、

ルカーナは預言者に対し、自分が改宗するためには奇蹟(ʿajza)を見せてくれと求めた。二人の近くに枝葉の茂った一本の樹があったので、預言者はその樹を指して、「神の許しを得てこちらへ来い」と言った。するとその樹は二つに割れ、その半身が枝もろとも近づいてきて、神の使徒(預言者)の面前に止まった。ルカーナは預言者に「お前は私に偉大な事柄を見せた。ではその樹に戻るよう命じてみよ」と言った。そこで預言者はルカーナに対し、もし自分が樹に命じて本当に樹が戻ったなら改宗するという言質を取った上で、その樹に命令を発した。樹は戻って、残りの半身と合体した。しかしルカーナは改宗せず、後になって改宗し、メデイナに住んだ。¹⁶⁾

となっていて、樹が二つに分かれるという新たな細部や、ル

カーナの改宗に関する情報が付加されている。『完史』では、預言者に最も激しく敵対した人々の一人としてルカーナの名が挙げられ、『預言者伝』とほぼ同一の伝承が記される。⁽¹⁷⁾

他方、アズラキー al-'Azraqī (八五八年以降歿) の『メッカ史』 *Akhdar Makka* には、メッカの「樹木のモスク」 Masjid al-Shajara とその向かいにある「魔神のモスク」 Masjid al-Jinn についての次のような記述がある。

伝えられるところでは、預言者は魔神のモスクにあった樹を呼んで、何かを訊ねたという。するとその樹は根っ子で地面を引っ掻きながら近づいてきて、彼の面前で止まった。預言者は樹に質問をし、その後には命令を發したので、樹は元の場所へ戻っていった。⁽¹⁸⁾

ここではルカーナの名には言及されず、ごく素朴な逸話の形を取った奇蹟譚になっている。逆に時代が下ると、より複雑な細部描写が付加される傾向にある。十六世紀マムルーク朝の歴史家ディヤールバクリー Husayn ibn Muhammad al-Diyarbakrī (一五八二年歿) の預言者伝『貴重な魂の状態に関する五部の歴史』 *Ta'rikh al-Khamsi fi Ahwal al-Nafs al-Nafs* における「預言者の奇蹟の記述」を見てみよう。

彼(ムハンマド)がイスラムへの入信を呼びかけたアアラビー al-'Arabī の伝承によると、樹木がムハンマドの使徒性

(al-risāla) を証言したという。アアラビーが「誰かお前の言う事柄の証人はいるのかね」と訊ねると、ムハンマドは「いるとも。この樹がそうだ」と答えて、その樹を呼んだ。樹が近づいてくると、彼はその樹に証言を求めたので、樹は彼の言う通りだと三度証言したのち、元の場所へ戻った。それから彼は、二本の樹に合体と分離を命じた。彼はある人に、棗椰子のところへ走ってゆき、それらに向かって「神の使徒はお前たちに合体を命じられた」と言うよう命じ、棗椰子は合体した。彼がその使命を果たすと、今度は樹に対し、元の場所へ戻るよう命令せよと命じ、樹は元に戻った。彼(預言者)が眠ると、一本の樹が地面を割いて到来し、彼の上に立った。彼が目覚めたときにそのことを告げると、「あれは神に対し、私に挨拶する許しを求めて許可された樹なのだ」と言った。⁽¹⁹⁾

このあと、メッカ東方の町タライフへの遠征(六三〇年)の帰途、真夜中に預言者が鞍上で居眠りしながら近くの谷間を進んでゆくと、スイドラの樹が二つに分かれた形で彼の上を覆ったという奇蹟譚も記される。樹木が覆いを作るというのは、イブン・イスハークの『預言者伝』で語られる、雲や樹木の枝が預言者のために日蔭を作ったという奇蹟譚⁽²⁰⁾と同類であろう。

(2) 奇蹟譚から反奇蹟譚へ

ここで興味深いのは、中東世界においては右の預言者の奇蹟譚とともに、そのパロディーとも称すべき反奇蹟譚——すなわ

ち、ベイコンの『随想集』所収の逸話や漱石の「マホメツト喚山」説話の原型——も流布していたらしいことである。それが最もよく窺えるのは、多くの頓智話や笑話の主人公として知られるジュハー Juhā に帰せられた次の逸話であろう。

彼(ジュハー)が自分は聖者である(awālaya)と主張したので、人々は「お前にどんな奇蹟が起こせるのかね」と訊ねた。彼が「どの樹でも私が「来い」と命ずれば、その樹は私の命令に従うのさ」と答えると、人々は「この棗椰子の樹に「来い」と命じてみよ」と言った。彼は「おお棗椰子の樹よ、こつちへ来い」と命じたが、樹は来なかつた。同じことを三度繰り返してから、彼は立ち上がって歩いていった。「ジュハーよ、どこへ行きなさる」と訊ねられたとき、彼は答えて曰く、「預言者や聖者は高慢や自惚れとは無縁だからな。棗椰子の樹が私の方へやって来ないというのなら、私がそちらに赴こう」と。⁽²¹⁾

この逸話では、奇蹟を起こせなかつたジュハーを笑いや嘲りの対象にするという、彼をめぐる奇行譚に共通の枠組を取っているが、それと同時に「預言者や聖者は高慢や自惚れとは無縁」⁽²²⁾ inna al-'anbiyā' wa al-'awliyā' laysa 'inda-hum kibr wa-lā ghubūr といふ言葉自体が教訓になっている。その意味では、反奇蹟譚とはいへ、預言者や聖者を貶める内容にはなっていない点に注意すべきであろう。逸話の主人公を預言者からジュハーに替える

ことで、奇蹟譚から反奇蹟譚への転換は初めて成し遂げられたのだとも言える。

ジュハーは八世紀頃に実在した半伝説的な人物とされ、アラブ世界では長い年月のあいだにその周囲にさまざまな奇行譚・滑稽譚が凝集した。また、印刷本が刊行される十九世紀には、トルコのナスレットイン・ホジャ Nasreddin Hoca (十三一十五世紀頃にアナトリアに実在したとされる人物)とジュハーとが同一視され、元来は別個に発達してきた両者の物語が混淆して、その総計は膨大な数に上るようになる。ただし、右の逸話は古いアラブ文学のなかに典拠を求めえず、せいぜい十九世紀末にカイロで編纂された『ジュハー奇行譚 Nawādir Juhā』などにまで溯りうるにすぎない⁽²³⁾。従つて、奇蹟を示す対象が樹木である点では、十七世紀にヨーロッパに登場した「マホメツト喚山」説話との重要な共通性を持つにも拘わらず、両者を直接結びつけるのは実証性の点でやや難があると言わざるをえない。

他方、トルコ世界では「山が歩かないなら、聖者が歩く」⁽²⁴⁾ Dığ yürümese abdal yürür という諺⁽²⁵⁾が知られていることも注目値する。これは十七世紀初頭のネフイーザーテ Nev'izade 'Atîr (一五八三—一六三四/五年)の詩集にも引用があることが指摘されているので、少なくともその時代まで溯りうる由緒のある言葉であろう。さらに、ルイーギ・バッサーノ Luigi Bassano da Zara の「トルコ人の生活に特有の風俗習慣」⁽²⁶⁾ I costumi et i modi particolari de la vita de' Turchi (ローマ、一五四五年)に「トルコ人にとって彼らの預言者は「謙虚であつた。彼が山に向かつて自分の

方へ来いと命じても山が動かなかったとき、彼はわざわざ自分から山の方へ歩いていった」という一節があることからも、ペイコンより前にこの種の諺がトルコ世界で流布し、しかもそれがヨーロッパ人の耳に達していたことも確認できる。そしてここでも、諺自体は預言者や聖者の謙虚さを示す証拠として理解されていたことになる。

もつとも、元来の奇蹟譚で用いられた樹木が、なぜトルコの伝承において山に変わったのかは必ずしも明らかではない。確かに『コーラン』には、「たとえ『コーラン』が山を動かすほどのものであったとしても(中略)それらはすべて神に属する」(wa law 'anna qur'ānān suyyirat bi-hi-jibālu . . . balli-llāhi-tamru jamī'an (第13章31節)のような聖句もあり、エジプトのイブシーヒー²⁵・Ishihī, Shihāb al-Dīn Muhammad 'ibn Ahmad (一三八八—一四四六年頃)による逸話集『諸学精華撰』第七十八章にも、信仰の深い人物が山を動かしたという奇蹟譚が載せられているので、樹木よりも大きな驚異を現出させる素材として好まれたということかもしれない。ただ、伝承の変容過程としては、① 樹木をめぐる預言者の奇蹟譚、② 樹木をめぐるジュハー(≠聖者)の反奇蹟譚、③ 山をめぐる預言者・聖者の反奇蹟譚が、① ↓ ② ↓ ③の順序で生じたという道筋を想定するのが論理的であろうが、右に記した通り、文献上は②に対応するジュハーの逸話がせいぜい十九世紀に溯りうるだけなのに対し、③に対応するトルコの諺の起源は十六世紀頃まで辿れるので、むしろ① ↓ ③ ↓ ②という、やや想定しにくい道筋を示唆している。結局、現存す

る文献で辿れるよりさらに早い時期にジュハーの逸話の元版が存在し、それがトルコ語の諺に影響を与えたと考えるのが最も矛盾の少ない解釈かもしれない。

四、中東からヨーロッパ、日本へ

「マホメット喚山」の諺は、中東からヨーロッパへ、おそらくはトルコ語が媒介項となつて伝えられたと思われる。そのヨーロッパ世界においても、奇蹟譚ないし反奇蹟譚と山との結びつきが違和感なく受け入れられたであろうことは、『新約聖書』にあるイエスの言葉——「もしあなた方に辛子の種ほどの信仰心があるなら、この山に「ここから向こうへ移れ」と言えば山は移るのです。あなた方にできないことは何一つありません」——によつても窺いうる。また、奇蹟譚にせよ反奇蹟譚にせよ、それが異教徒の預言者を揶揄したり嘲笑したりするためではなく、むしろその「謙虚さ」や「大胆さ」という肯定的な資質を示すために用いられた背景には、十六世紀から十七世紀にかけてオスマン帝国の軍事的脅威が遠のき、冷静かつ客観的にイスラムを眺める余裕がヨーロッパ人のあいだに生まれ始めていたという事情もあるのだろう。フランスの思想家・懐疑論者として知られるペイル Pierre Bayle (一六四七—一七〇六年) は、その『歴史批評辞典』*Dictionnaire historique et critique* (一六九六年初刊)の「マホメット」Mahomet の項において、マホメットが「二本の木を呼ぶと、それらの木は合体してこちらへ来、彼が命令を下す

と別々に分かれて引きさがった⁽²⁸⁾』という奇蹟譚その他を引用し、それについて、次のような批判的な言葉を述べている。

奇蹟など何もやっていないとマホメットが自ら語ったのはかくれもない事実だが、にもかかわらず信者たちは彼に多くの奇蹟を帰している⁽²⁹⁾。

マホメット教の古伝説集に見られる滑稽な記述を利用してマホメット自身をいまわしいもの、笑うべきものに見せようとしたら、それは誰に対しても、善人に対しても悪人に対しても守るべき公正さを踏みにじることになる(中略)。してもいないことを人になすりつけてはいけなから、マホメットが自分でそう言ったことが事実でなければ、信者たちが彼について語る夢物語を楯に取ってマホメット攻撃論を組み立てることは許されない⁽³⁰⁾。

これは、そうした客観的判断の好例である。

さて、ヨーロッパ世界において、諺としての「マホメット喚山」が最も早く記録されたのは、意外なことにスペイン語圏であるらしい。『随想集』のなかでこの逸話を紹介したベイコンは、それに先立って『決まり文句と優雅な表現の貯蔵庫管理人』*Promus of Formularies and Elegancies* (一五九四—九五五年頃)と題する控え——ラテン語や英語から、フランス語、イタリア語、スペイン語にまで及ぶさまざまな古今の名句、警句、諺などの抜粋——を残しており、そのなかでも、

Se no va el otero a Mahoma yaya Mahoma al otero.⁽³¹⁾
(山がマホメットの方へ行かないなら、マホメットが山へ行くだろう。)

をスペイン語の諺として書き留めている。彼は『随想集』でこれを利用して、スペイン語の“otero”を「丘」Hillと訳したことになる。ただ、ベイコンもこの諺だから「大胆について」に記したような物語全体を組み立てることは難しかったと思われるので、例えば前に引いたバツサーノの『風俗習慣』に類する関連資料を手許に置いていた可能性がある。またほぼ同時期、最初のスペイン語・スペイン語辞典とされるコバルピアス *Setas-tian de Covarrubias Orozco* (一五三九—一六一三年)の『カステイリヤ語またはスペイン語の宝典』*Tesoro de la lengua Castellana o Española* (マドリッド、一六一一年)にも、

Pues no puede ir el otero a Mahoma, yaya Mahoma al otero.⁽³²⁾
(山がマホメットの方へ行けないのだから、マホメットが山へ行くだろう。)

という、やや異なる形の諺が掲載されているが、ベイコンの『貯蔵庫管理人』と同様、諺の含意については何も注釈がない。そこでベイコンは、元来は預言者の謙虚さを示す逸話であったのを、意図的に大胆さの証拠に変容させたのかもしれない。

謙虚さの証しとしての「マホメット喚山」説話は、十八世紀

ハンブルク生まれの詩人ハーゲドレン Friedrich von Hagedorn (一七〇八―一七五四年) の「格言詩」Epigrammatische Gedichte のなかに「マホメットと丘」Mahomet und der Hügel という作品として語られている。

魅惑されたムスリムたちの預言者は、人々に向かってこう語った。

真理の証拠として我らが神の下し給う決定によると、お集まりの信徒たちよ、そなたたちが立派な信仰を持つならば、

あそこに憩っている丘もいつか我らのもとに近づくであろう……

おいで、丘よ、私の言葉を聞くがいい。汝、大地の子よ、創造主の呼び声を理解せよ。その声は私の身体に響き渡る。彼が望むのは、この民のもとで一つの奇蹟が見られること、ここ、我らの前にそれが現われること！ さあ、立て、身を起こせ……

どうしたのだ、お前は休んでいるのか。では今日は休むがいい。敬虔なるそなたたちには、私が見つめる道徳的奇蹟をお目につけよう、私は何と謙虚なことだろう。

不精な丘がマホメットの方へ来ようとしないうのなら、マホメットが今、不精な丘の方へ赴こう。

Zum Volk sprach der Prophet bekehrter Muslimänner:

Der Wahrheit zum Beweis, ist unsers Allah Schluß,

Daß, wenn ihr würdig glaubt, versammelte Bekenner,

Der Hügel, der dort ruht, sich einst uns nähern muß . . .

Auf, Hügel, höre mich! Vernimm, du Kind der Erde,

Vernimm des Schöpfers Ruf! Der Ruf erschallt durch mich:

Er will, daß diesem Volk ein Wunder sichtbar werde,

Erscheine hier vor uns! Auf, auf! Erhebe dich! . . .

Was? Ruhst du? Ruh denn heut! Nun stell' ich euch, ihr Frommen,

Ein sittlich Wunder dar, wie demuthvoll ich bin:

Will nicht zum Mahomet der träge Hügel kommen;

So geht irtz Mahomet zum trägen Hügel hin.⁽³³⁾

「私は何と謙虚なことだろう」wie demuthvoll ich bin という言葉からは、ジュハーの逸話やトルコ語の諺に籠められていたと同様の意味づけが感じられよう。

しかし、十八世紀から十九世紀にかけて、こうした元来の宗教的含意は薄れ、預言者や聖者の行為が人間一般に敷衍されて、「己のできる事柄をなせ」「動ける者が動けない者の許を訪れるべし」という世俗的・実践的な行動規範へと変化してゆく。先に見た、十八―十九世紀ヨーロッパ文学の用例はみな、この世俗的な意味合いを持っていた。一方、こうした歴史的文脈のなかに漱石の『行人』の一節を置き直してみると、その典拠となっ

たベイコンの諺解釈自体がきわめて独自であったのと同様、漱石の解釈もまた他に類を見ない独特のものであったことが判明する。「塵勞」における「私」は、最初にこの説話に接した若い頃、「い、滑稽の材料を得た積りで、それを方々へ持つて廻」つたが、ある先輩から「あ、結構な話だ。宗教の本義は其處にある。それで盡してゐる」と言われ、何年もたつて旅先で一郎と向き合つた段階になつてその先輩の言葉を思い出したとされる⁽³⁴⁾。たんなる滑稽譚・失敗譚としての見方は、何の解き明かしもなく「マホメツト喚山」説話の筋立てのみを聞かされたり、諺として提示されたりした現代人がごく普通に示す反応の一つである⁽³⁵⁾。漱石が「不言之言」でこの話を紹介したときも、それは滑稽譚の扱いであつた。それに対し、同一の逸話を「宗教の本義」と捉える見方は独創的である。

漱石の文章の発表から六十五年ほど後、文藝批評家の磯田光一（一九三二—一八七年）はこの説話解釈を取り上げ、「宗教の本義」という言葉をさらに敷衍して、山を現実社会の象徴と捉えている。磯田によれば、常識人や宗教家は自分から山へ向かつて歩いてゆくことができるが、一郎にはその妥協ができず、山とのあいだの断層、すなわち「近代的な意味での孤独」に悩むことになる。そして、漱石が「山の不動性のリアリティを認めつつ、おのれの狂気からの救いを、現実を超えた「則天去私」のうちにネガティブに求め」たのに対し、白樺派は「山はこちらへ来るべきだ」という逆向きの方向へ傾いていったという大きな思想的見取り図を提示している⁽³⁶⁾。その見取り図の当否は別として

も、磯田は漱石ともども、長い歴史を持つこの古い説話に新しい生命を吹き込んで現代に蘇らせたと言えるであろう。

〔注〕

* 本文において、引用文中の活字級数を下げた丸括弧内は引用者による説明・補足である。

- (1) 作品の初出は『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』一九二二（大正元）年十二月六日—一九二二（大正二）年十一月十五日。単行本は大倉書店刊、一九二四（大正三）年一月。のち、『漱石全集』第五卷（彼岸過迄・行人）、岩波書店、一九六六年四月。以下の引用は単行本により、初出および『全集』の頁番号を付記する。原文は総ルビだが、引用にさいし適宜省略した。
- (2) 五七〇—七一頁。『漱石全集』第五卷、七二七—二八頁。初出は『東京朝日新聞』一九二三年十一月二—三日、第六面、「塵勞」（三十九—四十四）。『大阪朝日新聞』では第一面。
- (3) 一三七頁。『漱石全集』四三〇頁。初出は『東京朝日新聞』一九二三年一月十五日、第六面、「兄（六）」。『大阪朝日新聞』では第一面。
- (4) 五六七頁。『漱石全集』七二五頁。初出は『東京朝日新聞』一九二三年十一月二日、第六面、「塵勞（三十九）」。『大阪朝日新聞』では第一面。
- (5) 五七二頁。『漱石全集』七二八頁。初出は『東京朝日新聞』一九二三年十一月三日、第六面、「塵勞（四十）」。『大阪朝日新聞』では第一面。
- (6) 糸瓜先生（目次は「夏目某」）「不言之言」『ほと、ぎす』第二卷二—三頁、一八九八年十一月—十二月、一六一—一七頁、二〇—二二頁。のち、『漱石全集』第十二卷（初期の文章及詩歌俳句）、一九六七年三月、二七五—八一頁。引用は、初出誌二二頁、『全

集』二八一頁。初出の「臆」を『全集』は「憶」に改める。初出には句点「。」なし。

朴裕河『日本近代文学とナショナル・アイデンティティ』(早稲田大学大学院・総合科学芸術院教育学研究科博士学位請求論文、二〇〇三年)の第十二章『「行人」と沼波武夫』始めて確信し得たる全実在』は、沼波瓊音』始めて確信し得たる全実在』(東亞堂書房、一九一三年七月)が「塵勞」の成立に大きな影響を与えた可能性を示唆している。同論文(二七三頁)が指摘するように、沼波の著書の冒頭に「モホメット」の名前が登場するのは、漱石に「マホメット喚山」の逸話を想起させるきっかけになったかもしれない。

(7) 渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波文庫、一九八三年三月、六一頁。ただし、原文の引用は引用者による。原典＝Francis Bacon, *The Essays or Counsels, Civil and Moral*, Edited with Introduction, Notes, and Commentary by Michael Kieman, Oxford: Clarendon Press, 2000, pp. 37-38. この章は初版(一九九七年)および第二版(一九九二年)には見られず、第三版で初めて収録された。またこの作品には、戦前にすでに邦訳が存在した。

・高橋五郎訳『ベーコン論説集』玄黄社、一九〇八年十一月、「(三二)豪膽を論ず」二三三頁「山若しマホメットの所に來らずんば、マホメットは山の所に往く可し」。原文には傍点(△)あり。

・神吉三郎訳『ベーコン隨筆集』岩波文庫、一九三五年九月、「十二、大膽について」六二頁「もし山がマホメットの所に來る氣がないならば、マホメットが山へ往かう」。

なお、本書原典は漱石文庫にも二種類存在する。『漱石全集』第十六卷(別冊)、一九六七年四月、「漱石山房藏書目録」八二七頁。

・Bacon's *Essays and Colours of Good and Evil*. Ed. by W. A. Wright. London: Macmillan & Co. 1872.

・Bacon's *Essays*. Ed. with Introduction and Notes by F. G. Selby. London: Macmillan & Co. 1892.

(8) Byron Porter Smith, *Islam in English Literature*, Second Edition, Edited and with an Introduction by S. B. Bushru and Anahid Melikian and a Foreword by Omar A. Farrukh, New York: Caravan Books, 1975, p. 7.

漱石文庫所蔵本と同じライト校訂版 *Bacon's Essays and Colours of Good and Evil*, with Notes and Glossarial Index by W. Aldis Wright, New Edition, London: Macmillan and Co., 1876 の注 p. 302 も "I have been unable to trace any foundation for this story of Mahomet" と記す。中林隆明「漱石文学に表われた中東」(国立国会図書館主題情報部編『参考書誌研究』第三十二号、一九八六年十月、三二一-三四頁)もまた、ライト校訂版を披見した上で、その「注を見ると」、その出典は未詳とある。ただし同時に「スペインではよく知られた諺」との説も紹介している。ただ筆者が引用語、諺等の辞典で調べた範囲では、先のベーコンの使用例が最も古いようである(三二頁)と記している。スペインの諺については、本稿の後注(31)で紹介する。

(9) Brewer's *Dictionary of Phrase and Fable*, Revised Edition by Ivor H. Evans, London: Cassell Ltd., 1981, s. v. Mohammed, Mahomet, p. 747: If the mountain will not come to Mahomet, Mahomet must go to the mountain. 邦訳＝E・C・ブルーワー／加島祥造主幹・鮎沢乘光編集『ブルーワー英語故事成語大辞典』大修館書店、一九九四年五月、一一四四頁「アラブ人たちがマホメットに彼の教えを奇跡によって証明してみせてほしいと頼むので、マホメットは彼のもとにやって来いとサファ山に命じた。しかし山は動かず、マホメットはいった。「神は慈悲深い。もし山が私の言葉に従うならば、山がのしかかってきて私たちは潰されてしまったことであろう。だから私の方から山に行こう。強情な子孫に慈悲を垂れたもう神に感謝」。ただし(本稿で以下に示す

ように)、山の名前を「サファ」Mount Safaとし、預言者の言葉を右のように伝える伝承は東西いずれの文献にも見当たらず、典拠不明である。他の辞典・索引類としては、

・ *The Oxford Dictionary of Quotations*, Third Edition, Oxford: Oxford University Press, 1979, p. 25, no. 33 (s.v. Bacon).

・ *Stith Thompson, Motif-Index of Folk Literature*, 6 vols., Bloomington: Indiana University Press, 1932-36, Vol. 4, p. 60, 1831: Motif 1831: Mountain (tree) when the mountain will not come to him.

などが挙げられる。英語圏の諺辞典は後注(14)および(31)、ドイツ語圏の引用句辞典の類は後注(24)(27)(33)などさまざまな都度掲げることにする。

- (10) シャーロット・ブロンテ作／遠藤寿子訳『ジェイン・エア』上、岩波文庫、一九五七年四月、一九二頁。割注に「マホメットがアラビア人に奇蹟を、求められ、山に向ってここへ来てくれとたのんだが山は動かず、彼のほうが行こうとどろいた古事から」である。原典 = Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Edited by Jane Jack and Margaret Smith, Oxford: Clarendon Press, 1969, p. 139 (Chapter XII).

この作品は戦前に邦訳が二種類存在した。ただし、いずれも注はなし。

① ブロンテ作／遠藤壽子訳『ジェイン・エア』上、世界大衆文學全集第六十一巻、改造社、一九三〇年九月、二二二頁「成程、山は決してマホメットの方へは動かかな。だから、君が精々することは、マホメットを山へやる手傳をする」ことだ。君に「ここへ来て貰はんけりやならない」(戦後の岩波文庫版の原本。原文は総ルビ)。

② ブロンテ著／十一谷義三郎訳『ジェイン・エア』世界文學全集第二期5、新潮社、一九三一年八月、一二〇頁「山をマホメットの處へ持つて来ることは出来ないが、マホメットを

山の方へ行かせることはあなたにも出来るんだ。あなたにここへ来て戴かなくちやなりませんまい」。

- (11) 鈴木力衛訳「二人の若妻の手記」『バルザック全集』第十六巻、東京創元社、一九七四年十二月、九九頁。割注に「マホメットはある日、山を呼び寄せてみせるといつて人を集めたが、三度呼んでも山が動かかないので、自分から山のほうへ歩き出したと云ふ」である。原典 = Balzac, *La comédie humaine*, Edition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, 12 vols., Vol. 1, *Études de mœurs: Scènes de la vie privée*, Paris: Gallimard, 1976, p. 284. 424 p. 1277 の注記には “Allusion au mot célèbre que la légende a prêté au prophète musulman: « Montagne, puisque tu ne veux pas venir à Mahomet, Mahomet ira à toi. »” とある。

鈴木力衛訳はすでに戦前に刊行され、注記も付されていた。『二人の若妻の手記』前篇、バルザック人間劇叢書第五、私的生活繪巻、東苑書房、一九四三年五月、二四〇頁。

- (12) *Johann Peter Hebel Werke*, Herausgegeben von Otto Kleiber mit Zeichnungen von Felix Hoffmann, 3 vols., Vol. 3: Erzählungen und Aufsätze des Rheinischen Hausfreundes, Zweiter Teil, Basel and Stuttgart: Birkhäuser Verlag, 1959, pp. 265-66; A. Wesselski, Vol. 2, pp. 190-91, note 372 (書誌は後注(21)参照)に引用あり。

(13) *The Collected Letters of Oliver Goldsmith*, Edited by Katharine C. Balderston, London: Cambridge University Press, 1928, pp. 30-31: To Daniel Hodson, 27 December, 1757.

(14) 同様の用例として、ブルワー＝リットン Edward Bulwer Lytton (一八〇三—一七三年)の小説『カクストン家の人々』*The Caxtons* (一八四九年)の一節 (Part Sixth, Chapter IV) や、若き日のイタリヤの詩人レオパルディ Giacomo Leopardi (一七九八—一八三七年)が、故郷レカナーティからミラノの文藝批評家ジョルダンニ Pietro Giordani (一七七四—一八四八年)に宛てた一八一七年七月十四日付けの書簡が挙げられる。

前者は、主人公バイシストラタス・カクストン Pisisstratus Caxton (愛称システイ Sisy) の父親オーガスティン Augustine Caxton (愛称 Austin) が友人たちからロンドンの社交界へ出るよう勧められたとき、これを断わる科白の一部。キティー Kitty は妻キイト Kate Caxton の愛称。後者は「シヨルダーニに念々にゆきたくとも」「僕が君の許に飛んでゆかないよう、鎖や鉄格子が僕を引きとめることでしよう」と述べて、自分が父親の束縛という監獄のなかにいることを示唆した一節である。

・「たとえ友情のためであれ、キティーも私も習慣を変えることはできない。彼女には仕上げねばならぬ大きな仕事があるのだし、私とて同様だ。山は、とくに仕事中は動くことができない。しかしマホメットは、好きなときに山の方へ来ることをかじめる」。The Caxtons: A Family Picture, by the Right Hon. Lord Lytton, London: George Routledge & Sons / New York: E. P. Dutton & Co., 1901, pp. 162-63; *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, Third Edition, Revised by F. P. Wilson, Oxford: Clarendon Press, 1970, p. 547, M1213: If the mountain will not come to Mahomet, Mahomet must go to the mountain.

- ・「僕はマホメットの山のような状態です、山以外はすべてが動けるのだから、山に会うためには自分が山の方へ来なければなりません」。Lettere, a cura e con un saggio introduttivo di Rolando Damiani, Milano: Arnoldo Mondadori, 2006, p. 85; A Pietro Giordani, Recanati 14 Luglio 1817, Salvatore Battaglia, *Grande dizionario della lingua Italiana*, vol. 10, Torino: Unione Tipografico, Editrice Torinese, 1978, p. 839, s.v. Montagna.
- (15) *al-Sīra al-Nabawīya li 'Ibn Hišām*, Ed. Muṣṭafā al-Saqqā, 'Ibrāhīm al-'Abyārī and 'Abd al-Hafīz, Shalabī, 2 vols., Cairo: Shanika Maktaba wa Matba'a Muṣṭafā al-Bāṭī al-Halabī wa 'Awlād-hu, 1955, Vol. 1, p. 391; *Sīra Sayyid-nā Muḥammad*, Herausgegeben von Ferdinand Wistenfeld, 2 vols., in 3, Göttingen: Dieterichsche Universitäts-

Buchhandlung, 1958-60, Vol. 1, p. 258; 'Abū Muḥammad 'Abd al-Malik 'ibn Hišām, *Sīra al-Nabī*, Ed. Muḥammad Muḥyī al-Dīn 'Abd al-Hanīd, 4 vols., Cairo: Dār al-Hidāya, n.d., Vol. 1, p. 418.

・英訳 = A. Guillaume, *The Life of Muḥammad: A Translation of Ibn Isḥāq's Sīra Rasūl Allāh*, London, New York and Toronto: Oxford University Press, 1955, pp. 178-79.

・邦訳 = イブン・イスハーク著 / イブン・ヒシャーム編註『預言者ムハンマド伝』1, 後藤明・医王秀行・高田康一・高野太輔訳, イスラーム原典叢書, 岩波書店, 二〇一〇年十一月、四〇三—四頁。

」の箇所については、Josef Horowitz, "Zur Muḥammadlegende," *Der Islam*, Vol. 5 (1914), pp. 49-53 に指摘がある。

- (16) 'Ibn al-'Aṭhr, *'Uṣd al-Ghāba fī Ma'rifa al-Salāba*, Ed. 'Alī Muḥammad Mu'awwad and 'Adīl 'Aḥmad 'Abd al-Mawjūd, 8 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 2008, Vol. 2, pp. 293-94, no. 1708; Josef Horowitz, p. 51, note 1.
- (17) 'Ibn al-'Aṭhr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh*, Ed. C. J. Tomberg, 12 vols., Beirut: Dār Saḍīr, 1965-67, Vol. 2, p. 76.
- (18) *Die Chroniken der Stadt Mekka*, Gesammelt und auf Kosten der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft herausgegeben von Ferdinand Wistenfeld, 4 vols., Leipzig: F. A. Brockhaus, 1858-61, Vol. 1, Geschichte und Beschreibung der Stadt Mekka von Abul-Walīd Muḥammad ben Abdallah el-Azrakī, p. 424; Josef Horowitz, p. 51, note 1.
- (19) al-Diyārbakrī, *Ta'rīkh al-Khams fī 'Aḥwāl 'Anfas Nafīs*, 2 vols., Beirut: Mu'assasa Sha'bān, n.d., Vol. 1, p. 220.
- (20) *al-Sīra al-Nabawīya*, Vol. 1, p. 181; *Sīra Sayyid-nā Muḥammad*, Vol. 1, p. 115; *Sīra al-Nabī*, Vol. 1, p. 195; 英訳 = p. 80; 邦訳 = 第一巻「一十三頁」Josef Horowitz, p. 52.
- (21) 'Akkbār Juhā, Ed. 'Abd al-Sattār 'Aḥmad Farrāj, Cairo: Maktaba

Misc. n.d. [1954], pp. 137–38.

・ 英雄 = *Der Hodscha Nasreddin, Türkische, arabische, berberische, maltesische, sizilianische, kalabrische, kroatische, serbische und griechische Märlein und Schwänke*, Gesammelt und herausgegeben von Albert Wesselski, 2 vols., Weimar: Alexander Duncker Verlag, 1911, Vol. 2, pp. 16–17, no. 372; *Nasreddin Hodscha 666 wahre Geschichten*, Übersetzt und herausgegeben von Ulrich Marzolph, München: Verlag C. H. Beck, 2006 [1996], p. 214, no. 509.

・ 仏訳 = *Mille et un contes, récits et legends arabes*, par René Basset, 3 vols., Paris: Maisonneuves Frères, 1924–26, Vol. 1: Contes merveilleux, contes plaisants, p. 499, no. 191; *Idem*, Anthologie établie par René Basset, 2 vols., Collection Merveilleux n° 29, Paris: José Corti, 2005, Vol. 1, pp. 287–88, no. 191: Si le palmier ne va pas à Djoh'a, c'est djoh'a qui ira au palmier. 初出は René Basset, "Contes et legends arabes DCXCIX," *Revue des Traditions Populaires*, Tome XIX, 19^e année n° 7, juillet 1904, p. 311.

バッセやヴェッセルスキーはその注において、この逸話が「マホメット喚山」説話の原型になった可能性のあることを指摘し、後者はヨーロッパへの媒介項としてヘーメルやハーゲドルの作品を挙げている。前注(12)および後注(33)参照。

- (22) 前記の『シムナーに関する諸情報』『*Akhtar Juhā*』では、この逸話は「第二部 古いアラビア語文献に見出せぬ奇行譚」に収められる一方、トルコ系の『ナスレットイン・ホジヤ物語』には今述べたような。ヴェッセルスキーは『*Nawādir al-Knūḥa Nasr al-Dīn al-Mulagqab bi Juhā al-Rūmī*, Būḥāq, ca. 1880』や『*ホロヴァーミン*』*ち Qissa Juhā*, Beirut, 1886』を利用している。

- (23) *Redhause Yeni Türkçe-İngilizce Sözlük*, Istanbul: Redhouse Yayınevi, 1968, p. 266, s.v. *dağ*: *proverb* If the mountain does not go to the Prophet, the Prophet must go to the mountain; Karl Steuernwald, *Türkisch-Deutsches Wörterbuch*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1972,

p. 2, s.v. *Abdal*: Wenn der Berg nicht zum Propheten kommt, muß der Prophet zum Berg kommen. 45たC. Brockelmann, "Der Prophet und der Berg," *Der Islam*, Vol. 6 (1916), p. 298 は一八九九年ブダペスト刊行の *Künos, Chrestomathia Turcica* より、「山よ歩け、山よ歩け、もし山が歩かないなら、聖者よ、お前が歩け」*dağ yürüü dağ yürüü*, *dağ yürümezse abdal yürü üzün*、細部に異同のある諺(諺の末尾に超越形三人称単数「yürüü」の代わりに命令形二人称単数「yürü」を用いる)を紹介する。「*abdal*」は、元来は神秘主義において「枢軸」*quib* を頂点とする聖者の階層秩序のうちの一つである「代替者」を意味するアラビア語「*abdal*」(単数形「*badal*」)に由来する言葉で、一般には「聖者」。トルコ語では単数扱われる。

右に挙げた二つの辞典が、トルコ語の諺のなかの単語「*abdal*」に対し「聖者」*the Saint / der Heilige* ではなく「預言者」*the Prophet / der Prophet* の訳語を与えているのは、英語圏・ドイツ語圏で人口に膾炙した諺の形を全体としてそのまま、変更せずに対応させたためであろう。

ちなみに、『竹内和夫』『トルコ語辞典』(ポケット版、大学書林一九八九年)、八九頁は、「*abdal*」を「*apal*」に替えた形を慣用句として掲げ、「(山が歩かなければ馬鹿が歩く)人の尻ぬぐ」という訳を付している。これは以下の辞書の記載が典拠と思われる。 *Dictionary of Turkish-English Proverbial Idioms: with Interpretations and Translations (Türkçe-İngilizce Şiye Misalleri Gösteren Sözlük)* by Kerest Halg, A Collection of 2250 Proverbs, Sayings and Idiomatic Expressions Peculiar to the Turkish Language, with an Alphabetical Index of Interpretations and a Preface by Malcolm Burt, Amsterdam: Philo Press, 1969 [Istanbul, 1951], p. 71, no. 661: *Dağ yürümezse apal yürüü*, —if the mountain does not walk, the silly man does (must) walk. = if the mountain will not come to him, he must go to the mountain, the weaker must give in.

- (24) F. Babinger, "Zu Islam VI, 298 bzw. XII, 224," *Der Islam*, Vol. 13 (1923), p. 105. ノンノイーキーンにこのことは'E. J. W. Gibb, *A History of Ottoman Poetry*, Edited by Edward G. Browne, 6 Vols., London: Printed for the Trustees of the "E. J. W. Gibb Memorial" and Published by Messrs. Luzac and Company Ltd., 1965 [London: Luzac, 1900-09], Vol. 3, pp. 232-42.

なぞ' Basset, Horowitz, Brockelmann, Babinger の論考は' *Gelegte Worte: Der Zitienschatz des Deutschen Volkes*, Gesammet und erläutert von Georg Büchmann, 31. Auflage durchgesehen von Alfred Grunow, Berlin: Haude & Spenerische Verlagsbuchhandlung, 1964, p. 453 にきよめつ言及されてゐる。ただし' 十九世紀末に刊行された『シユハロー奇行譚』の成立を一六三一年まで溯るとするの根拠にさしてゐらう。

- (25) J. H. Mordmann, "Miscellen 4. Der Berg und der Prophet," *Der Islam*, Vol. 12 (1922), pp. 224-25. マッサラーの記事は' サムンザノーン Francesco Sansovino (一五二一—一八六年) の『マルコ人の起源と帝國に關する一般史』*Historia universale dell'origine et imperio de' Turchi* (ヴェネツィア、一五六四年初刊) の諸版に繰り返し引用されてゐる。例へば' Venezia: Stefano Zazzara, 1568, p. 73: Di molti altri trattenimenti piacevoli ch'usano i Turchi. Cap. XLII: Venezia: Altobello Salicato, 1582, pp. 66-67; Venezia: Alessandro di Vecchi, 1600, p. 66. 原文は以下の通り。[Q]uesto gran Profeta, del qual ancor narrano ch'era humile, & comandando egli a una montagna che dovesse venire a lui, & non si movendo, egli si degno andare a lei. 版により綴り字の細部に異同がある。
- (26) al-'Ibshīh, *al-Mustatraf fi Kill Fann Mastazraf*, 2 vols., Beirut: Dār al-Jil, 1992, Vol. 2, p. 772; Horowitz, p. 51. メッカ南東に位置するアブー・クハインス山でのフタイル・イブン・イヤード Fudayl 'ibn 'Yād の逸話。
- (27) 「メタイによる福音書」第17章20節。並行伝承は、同福音書第

21章21節「マルコによる福音書」第11章23節、「ルカによる福音書」第17章6節。関連する伝承として、「コリント人への手紙第一」第13章2節に「たとえ私が山を動かすほどの完全な信仰を持つていたとしても」can ekhō pāsan ten pistin hōste orē mehistanai ㄱ&ㄴ' Lutz Röhrich, *Das große Lexikon der sprachwörtlichen Redensarten*, 3 vols., Freiburg, Basel and Wien: Herder, 1991, Vol. 1, s.v. Berg, p. 175 は' ヨーロッパで反奇蹟譚としての諺が人口に膾炙した理由としてこの点に言及する。

なぞ' マルコ・ポーロ Marco Polo (一二五四—一三二四年) の『東方見聞録』は' 一二二五年、バグダードのカリフが『新約聖書』の右の一節を根拠に、キリスト教徒に対し山を動かす奇蹟を見せるように、奇蹟が起らなければイスラムに改宗するようにと迫ったところ、ある靴屋の祈りによって実際に山が移動した事件を記録してゐる。The Book of Ser Marco Polo the Venetian Concerning the Kingdoms and Marvels of the East, Translated and Edited, with Notes, by Colonel Sir Henry Yule, Third Edition, Revised throughout in the Light of Recent Discoveries by Henri Cordier (of Paris), 2 vols., London: John Murray, 1926, Vol. 1, pp. 72-74. 邦訳『マルコ・ポーロ『東方見聞録』1、愛宕松男訳注、平凡社東洋文庫、一九七〇年三月、五二—五八頁。J. Horowitz, p. 51 にも言及がある。

- (28) 野沢協訳『歴史批評辞典』II (E—O)、ピエール・ベール著作集第四卷、法政大学出版社、一九八四年十一月、六六二頁。原典 = *Dictionnaire historique et critique* par Mr. Pierre Bayle, cinquième édition, revue, corrigée, et augmentée avec la vie de l'auteur, par Mr. des Maizeaux, Vol. 3, Genève: Slatkine Reprints, 1995 [Amsterdam: P. Brunel etc., 1740], p. 257. シェンロー Urban Chevreau (一六二一—一七〇一年) の『世界史』*Histoire du monde* 第五卷(第三冊) 五頁 (Livr. V, Tom. III, pag. 8) からの引用とする出典注あり。実際の出典は Chevreau, *Histoire du monde*, Tome second, Paris:

Chez la veuve d'Edme Martin & Jean Boudot, 1686, p. 6 (Livre cinquime, Chapitre 1). *スペインの一節は* 'A. Wesselski, Vol. 2, p. 191 (一七二〇年刊行の第四版(通称第三版)一八五二頁より引して)。

(29) 野沢協訳、六五七頁。原典 p. 257.

(30) 野沢協訳、六六二頁。原典 p. 258.

(31) Sir Edwin Durning-Lawrence, *Bacon Is Snake-Spear*, Together with a Reprint of Bacon's *Promus of Formularies and Elegancies*, Colated, with the Original MS. by the Late F. B. Bickley, and Revised by F. A. Herbert, of the British Museum, London: Gay & Hancock, Ltd., 1910, p. 239: Folio 102, back. *スペインの『全集』第十二巻にはこの作品の抜粋しか収められておらず* 'H. Portによる校訂版(一八八三年)も未見。

前出のライト校訂版 *Bacon's Essays and Colours of Good and Evil*, 注 p. 302 は *スペインの『貯蔵庫管理人』の当該箇所を引くと同時に* ' *スペインのフエリペ二世(在位一五五六―九八年)の大臣ペレス Antonio Pérez (一五三九―一六一一年)が、亡命時代にエリザベス一世(在位一五五八―一六〇三年)の寵臣エセックス伯 Earl of Essex, Robert Devereux (一五六六―一六〇一年)に宛てたラテン語の書簡のなかで* ' *マホメットが山へ行けならのなら、山がマホメットの許へ行け* ' *si no puede yr Mahoma à Lotero, venga Lotero à Mahoma* *より逆の諺を引用して* *se llama a lo que se llama* *を指摘して* *る*。典拠は *Antonii Perezii ad Comitem Essexium, Singularem Angliae Magnatam, & ad Alios, Epistoliarum Centuria Una*, Nürnberg: Johannis Ziegleri Bibliopola, 1683, Epist. XIV, p. 18.

スペインのスペイン語引用は、英語圏のさまざまな引用句辞典にもこの諺の初出として登録されている。いくつか例を挙げ *る*。

・ *A Hand-Book of Proverbs Comprising an Entire Republication of*

Ray's Collection of English Proverbs, with His Additions from Foreign Languages and a Complete Alphabetical Index; In Which Are Introduced Large Additions, as Well of Proverbs as of Sayings, Sentences, Maxims, and Phrases, Collected by Henry G. Bohn, London: Bell & Daldy, 1867, p. 117: *If the mountain will not go to Mahomet, let Mahomet go to the mountain. Si no va el otero a Mahoma, vaya Mahoma al otero*. Since we cannot do as we would, we must do as we can.

・ Morris Palmer Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries: A Collection of the Proverbs Found in English Literature and the Dictionaries of the Period*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1950, p. 478, M1213: *If the mountain will not come to Mahomet, Mahomet will go to the mountain.*

・ *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, p. 547, M1213: *If the mountain will not come to Mahomet, Mahomet must go to the mountain (注14を既出)。*

(32) 影印版 = *Tesoro de la lengua Castellana o Española*, Madrid: Ediciones Turner, 1977, p. 842, s.v. olear. *この辞書の記載は* *このついでに* 斎藤文子先生にこの教示を賜わった。

(33) *Des Herrn Friedriches von Hagedorn sämtliche poetische Werke*, Erster Theil, Bern: Herbert Lang, 1968 [Hamburg: Johann Carl Bohn, 1757], p. 92. *Deutsches Sprichwörter-Lexikon: Ein Hausschatz für das Deutsche Volk*, Herausgegeben von Karl Friedrich Wilhelm Wander, 5 vols., Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977 [Leipzig, 1880], Vol. 5, col. 958 *をよむ* 注(21)を挙げた A. Wesselski, Vol. 2, pp. 190–91, note 372 に言及あり。

(34) 夏目漱石『行人』五七一頁。『漱石全集』七二八頁。初出「塵勞(四十)」。

(35) 例えば、注(9)で引用した『ブルーワー英語故事成語大辞

典』は、この諺の意味を「自分の思い通りにならず、避けることのできない運命に屈する人について、しばしば用いられる」と記す。成田成壽註釈『The Essays of Counsels Civil and Moral』英米文學叢書7、研究社、一九四八年九月、二二九頁にも「人が自分の意志を通す事が出来ない時、その不可抗力に屈することを指す」とある。マホメットの言葉を失敗者の負け惜しみや言い訳と捉える解釈であろう。

(36) 磯田光一『思想としての東京——近代文学史論ノート』国文社、一九七八年十月、七二―七七頁。初出は同「思想としての東京——日本近代化の精神構造(中)」、『月刊エコノミスト』第七卷二号、一九七六年二月、九七―九九頁。

〔付記〕 本稿は日本学術振興会平成二十四年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」(研究代表者・山中由里子、課題番号二二三二〇〇七四)による研究成果の一部である。